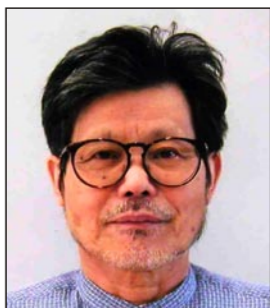


佐山広平



さやまこうへい

1934年生まれ  
菓子問屋の丁稚小僧、手作り鉛の職人見習い、印刷工場の工員の間  
愛知県立瑞陵高等学校定時制に入学し卒業  
国立愛知学芸大学国語科卒業  
愛知県立高等学校の教諭として6校を歴任  
趣味の陶芸において5回の個展と1回のグループ展を行う  
詩集「散乱する実在に」小説「華やいだ虚無を求めて」

季節に君は

風が吹く  
掌が記憶を受ける  
すると  
蝶の流す羽根の煌めきが空に充ちる  
世界が夢を吹き出す空の哀しみの  
愛が圍繞する夕暮の街路を  
君は求め歩きはじめ

祭りの記憶が君を圍繞する社を  
君は求め歩きはじめ  
風が語る  
意識が妣の国を受ける  
すると  
屈折する雲の変形が風景を覆う  
囁きが大気を埋める国の  
時間が消える澄んだ世界を  
君は求め歩きはじめ

歴史が母の微笑みに対峙する  
峠道の登攀に異層に賭ける意志を  
君は求め歩きはじめ  
風が沈む  
重い大気が地表を埋める  
苦い大気が世代を埋める  
思想が人を空洞化する  
世界が情念を腐食する  
意識が夢を墜落する  
そして  
愛しすぎる他者への圍繞する羞恥の時  
ほくたちの時代のため  
風景を君は超えようとする

陽の亀裂に

季節の巡りに天が揺れる君の意識  
思想に彷徨う歩みに  
観念が鳴りはじめ  
そして  
学校の庭は騒めきに煌めく  
君は教科書への愛に  
テニスコート白い線を辿る  
枯葉を敷いた道が伸びている  
雲の誘いの峠  
稜線に消える虚無の眩き  
そして  
知の錯乱に病む街路樹  
散りつづける木の葉の情念に  
風化する辞書を繰る  
刻みつづける時計の音の、この暗さを  
濡れた天日の、このアンニュイを  
生きつづける風景が伸びている  
意識の被われた地表で、鉛色のくすんだ空気が  
軋む  
すると

地球の公転がずれ、季節が死ぬ  
露に光る松葉の先にマナコが……  
視覚の触手の神経と、葉の先端との戯れ  
世界に触れるために眼孔に時間が奔る  
網膜を貫く傷口  
裂けた森の色彩が拡散する  
藪の刺と人間が重影する  
ビルディングの壁に  
舗道の音に  
人間が重影する  
ぼくらの世界

受賞の言葉 佐山広平

今僕は心から嬉しく思っている。

僕が詩というものを書きはじめたのは、定時制の高等学校に入学した時ぐらいからだだったが、当時は甘いセンチメンタルな詩を書きつづけていた記憶が今、残っている。

その後大学に入り六十年安保闘争の後、サルトルに夢中になり、深い理解もないまま、「……彼ら（詩人たち）は実用言語のまん中に放り出されているので、その実用性から言葉をはき放すために、奇妙なくみ合わせをつくらねばならない。……」（「文学とは何か」サルトル全集第九巻加藤周一・白井健三郎訳）を独断的に「意味の拒否」と受け取り、いささか言語遊戯に奔った時代がしばらくつづいた。

その結果である第一詩集「散乱する実在に」はほとんど無視されて来た。

そうした僕は、昨年の優秀賞受賞の時あたりから、少しずつ意味の復権を考えるようになった。そして受賞に勇気づけられ僕が書くことのできる詩を書きつづけている。

しかし、僕の今書ける詩は自己の内面をなぞる抒情的なものではない。

もっと、世界の不運不幸を見据え、社会的な詩を、ガラスの切り口のような言葉で形象せねばと思いつつ、今は全くできずにいる。

この受賞を期に今少し視野の広がりをもちたいものだ。

最後に、僕に詩を書く勇氣を与えて下さった人々に、ただただ感謝しつつ、筆を擱きたい。

## ぼくらが愛を信じた日々のために

春になった日  
蝶の羽根から夢幻が飛び立つ日  
鱗粉に咽せる空の青さに  
いつからかぼくらの愛は始まっていた  
ぼくらはいつも街の十字路で出会う  
授業を終えた君は山の手の学校から帰り  
工場から帰るぼくは山の手の学校へ向かう  
そして  
俯き眼を伏せ歩く君  
君の世界をぼくは盗み目に意識する

意識が遠くに響く日  
風に想いをおくる眼差しの中に  
いつからかぼくらは指を触れあっていた  
郊外を散歩しながら君は語る  
絵に耽溺した幼い記憶を君はひらき  
異質の世界を覗きあうぼくらの幼い思想  
そして  
樹木の流す死の不安の中で  
ぼくらは肌のぬくもりを確信しあう

砂は滑る  
砂は跳ねる  
すると  
砂は贖める  
砂は思惟する  
砂は愛する  
そして  
砂は悼み  
伝説の世界をぼくらに充たす

露を大気が帯びる暗い日  
紫陽花が皮膚を重くする日  
風に噎せる空の蒼さに  
いつからかぼくらは微かに贖めあっていた  
学校の帰り君は十字路で傘に倒される  
羞恥に染まる君の頬に街路が恥じる  
意識に押されぼくは傘を拾う  
そして  
匂いの満ちる舗道の上で  
君の世界をぼくは覗きこんだ

ぼくらの世代から消えない時代の歪みに  
夏の陽が照りつけていた日々  
ぼくらは砂浜を歩いた  
陽に透ける君の意識  
水平線に賭けるぼくの情念  
遥かに見える父たちの世界  
遥かに見える母たちの記憶  
ぼくらは祝福されて砂浜を歩いた

爽やかな秋の日

砂は重い  
砂は飛ぶ  
砂は光る  
砂は流れる

## 第二回「文芸思潮」現代詩賞 当選作

## 斉藤征義

### 朴の木沢のことだが

臨月のからだを松の枝葉で隠され  
丸木舟は 川霧にのまれた  
見えない岸の叫び声は あれは夫に違いないと思っただも  
戦さの怒号も悲鳴も 川霧に消えて  
痛みは鍾りとなって  
(おんなは 何を 孕んだのせ)  
シュブンナイまで行け と 夫は叫んだの  
シュブンナイはウグイのいる沢の村だが  
シュブンナイに着いたときは おんなは死んでいた

「シュ」を「鍋」  
「プシ」は「破裂」  
「ナイ」が「沢」  
って伝わるのは  
巨大な腹が破裂してしまったからだども  
すると「鍋」はおんなの「からだ」のこととなるが  
腹の底に 小さな沼を見た と いう者もあるし  
滝の音を聞いた と いう者もあるし  
(おんなは 何を 孕んだのせ)

聞けばまた  
「プシエ」は「朴の木」のことをいうんだ  
このあたりの山々に多くて  
初夏 沢の滝のひびきに かすかにゆれて  
花がおうさ  
村は 1886年に 強制移住によって  
消えてしまったけど

シュブンナイは いまのニサナイとよばれるあたりさ  
「ニサ」は「木の空洞」のこと  
がっばの太木が横たわったのか  
あるいは 奇怪な空洞の太木が 道をふさぐように  
空を見あげていたかさあ  
その空洞の底に  
小さな沼があったのか  
(おんなは 何を 孕んだのせ)  
それにしても朴の木沢のことだが

# メヒシバの川の

大きな川にそそぐ 小さな川を  
子どもの川っていうが あれは  
子どもが流される川のことだよ

切りきざまれて 切りきざまれて  
子どもが流される

おんなはまだ若いころ 誰かに背負われて  
この村にきた

暗い幾日もの揺れに泣きながら 川の音をきいた  
川があふれるたびに 岸辺を這って逃げた  
川は幾度もあふれ 岸辺は遠ざかった  
川の喘ぎに縛れたのは  
同郷というおとこに出会った春  
つぎの春に子どもが生まれ そのつぎの春にも  
子どもが生まれ そのつぎの子どもも生まれた  
そのつぎの春にも

ひとの魂は その肉体と結ばれていない  
メヒシバの魂も あらゆる器官から分離されている  
だがいずれの魂も あまねく器官に浸透し  
哀しみのときにだけ発光する

切りきざまれて流されるメヒシバの子どもらが  
川面をみどりいろに発光させ  
腫れた眼をして  
遠い森を眺む  
切りきざまれて 切りきざまれて  
子どもが流される

あの流れのひとつひとつの光りが  
子どもだよ  
おんなを攫ってきたのは誰だったのかね

# 夕立ちの後を

花こがひらかなないでいるから  
きょうも雨だ

と吉蔵が吉次郎に伝えた  
濡れた椴松の喘ぎが天を塞いでいた

吉次郎は妻のタミにいいのこし  
タミは後に添った啓造に伝えた  
燻る抜根の蔭に身をすくめて

啓造の子が啓太郎で  
官吏をめざして札幌へ行ったが  
大陸の戦地から帰らず  
轍はぬれて太く深く曲がって錆び

啓太郎の子を宿したという娘がきた夏  
好天のなかで少しは畑をやっていたが

咳のたえない細い身で

ある夕立ちのとき 川へ入っていき

こんな話は開拓のどこの家にもあるが  
鷗川の川の中で生まれた子が  
吉蔵とって

いまどき この床屋に来るんです  
耕せば煤の地層ひろがり

煤のつらなるなかに  
ああまるで流星の夕立ちのように  
はこべの花が満ちている

花こがひらかなないでいるからきょうも  
吉蔵は居眠りしながらつぶやいて  
夕立ちの後を歩いていく

## 受賞の言葉

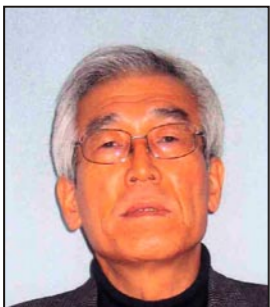
## 斉藤征義

「どこまでが本当の伝説で、どこが虚構なのか  
分からない」と詩を書く仲間から言われて、実  
は困っていたのです。

私の住んでいる北海道の山奥の小さな町に  
は、いたるところにアイヌ語地名があり、いく  
つかが漢字をあてはめられて和名になっている  
としても、その地の風景や聞きつてをたどると、  
その地名がつけられた理由や物語がうかびあが  
ってくるのです。しかし伝えられる物語が、ど  
の時代にどのような人によって修飾され、改変  
されてきたかは定かではありません。

私に語ってくれる理髪店の主人の話は、おそ  
らく人づてに聞いたことの教養と雑学なのでし  
ょうが、時々まるできのうのうのうのような事件  
や噂話からまり、どこまでが伝説でどこが虚  
構なのか、実際に分からないのです。

作品化に際しては、地元のアイヌ民族文化研  
究者小石川武美氏や、隣町の萱野茂先生らにご  
教示頂きました。萱野先生が亡くなられた日、  
もっと多くを聞いておくべきだったと胸が痛み  
ました。この賞を先生の墓前に伝えられること  
を嬉しく思います。



斉藤征義

さいとう まさよし

1943年 北海道帯広市生  
まれ

苫小牧東高校卒

民間企業取締役、社団法人

団体管理職をへて北海道穂

別町役場に勤め03年退職

高齢者たちと初めて取り組

んだ映画「田んぼdeミュー

ジカル」が全国的な話題

となり、コミュニティ・シ

ネマづくりに挑む

北海道詩人協会員

詩集「コスモス海岸」(土

曜美術出版販売)、「宇宙船

売却」(響文社)など

## 藤井陽見

### 音のある異常区

ざらざらに覆い隠した傷の裏に何があるのかと、聞く  
 膿すら出せずに巨は消えて、ひとり二千年の自慰  
 地面離れ、飛翔、武器、浮いていくのは僕だけだ  
 それ以外には誰も、そうしたら、僕は一体誰に向けて、この手記を？  
 気体となった人々は、どうして僕を殺せるのだ？

決意こそが最も意味を為さずに、殺し続ける都会とそれ以外の境界  
 僕は生まれたばかりに祈りをはじめ、成人となつては遂に上り詰めた  
 輪廻という馬鹿騒ぎは饒舌

(四十八回の気丈な五体という嘘を経て)

たかが決意、告白せよ！ 全人類が愚かという徳を持つことを  
 それを知らない子供から、性欲など取り上げるのが仕事と言われ、  
 そうしたら僕が、こんなに舌を向いて……。刃物が眩しい理由だ  
 そこにあるのは赤い穴だ。転がり落ちるのは丸い僕の体だ！

よく見ればそこらのもの、全てが赤く染まっているではないかと、思う、  
 思う間もなく、自分のからだに血塗れで、まだ盲目でないのを知る  
 そうか、これが母の顔  
 熱を持ったのは精子の時代から  
 暗い暗い概念を知っていく！ 僕は未来を知つたまま、また産まれていく  
 四十九度目の嘘をつく

微かに覚えのある匂い  
 狭い道の真ん中では肌の向上に盛んな女、僕は許した  
 墮胎を知らぬ海に用が無く、触れては錆びた鉄のようで  
 いつかの黒い空からやわらかい膿が降る、そして誰も呼ばないお前たちが  
 見得る！  
 埃が集まるその銀色の顔、貨幣価値など無いわけだ  
 お前も、お前も僕以外だ！  
 その何か、ゴムのような醜い突起の付いた顔、僕に向けている

鏡の懺悔が聞こえて  
 (僕と、僕以外と、それ以外の二人称、使わせた)  
 僕、僕以外の人とは仲良くなりたいたいと思つていたので  
 どこで、どこで、音のある異常区で  
 なあ僕以外！ いつか知っているか？ 分かれた日だよ！  
 誰かの膿であつた怒り、誇つた瞬間！



ふじい あきみ

1980年 山口県生れ 山口県在住  
 山口大学教育学部中退  
 その後上京し職を転々とし、故郷に  
 戻ってきてはまだ転々としている。  
 来年度より、数年間ほどアジアの一  
 国に赴任予定。

### 受賞の言葉

### 藤井陽見

活字離れ、になってやろうと思つていた時もありまし  
 て、日本語がなんだ、詩がなんだ、そもそも何なのだ、  
 などと、お酒を上品にいただく度に叫び散らかし、その  
 あと真夜中にこっそりと、けれど誰かに見てもらいたく  
 てしようがない詩を書いて、という日々が続いております。

そして私のような根性無しに限って、文芸賞がなんだ、  
 と言いながらコツコツ郵便局通いをするもので、受賞の  
 知らせをいただいた時の喜びようといったら……。

私事ではありますが、私は来年度より数年間、南西アジ  
 アのある国へ赴任する予定です。母国語である日本語と  
 も、多少は雰囲気理解できる英語とも違う、全く新し  
 い言語文化、環境のなかで過ごすこととなります。

その場所では、その言葉では、どのような表現  
 をすることができるのか、「詩」というものがその場所  
 で持つ意味とは何であるのか、また、新しい感覚から日  
 本という単位を考えたときに、日本語の詩というものが  
 持つ力とはどのようなものであるのか、考えてみたい、  
 考えてみたいと思いきっかけ、そして弾みをつけてくだ  
 さりましたこの賞に、深く感謝しております。  
 ありがとうございます。

老人病棟の父よ

今年の冬は  
何十年ぶりの寒さだとか  
観測史上初めての降雪量だとか  
今朝も風が吹き荒れて  
雪が頬に染みついてくる  
父よ  
老人病棟の父よ  
今は目覚めているだろうか  
この雪が目映っているだろうか  
「ここは留置場以下やなあ」  
「おれは何も悪いことはしとらん」  
両手を縛られている父よ  
両手を縛られて呻いている父よ  
あなたの叫びは私の叫び  
あなたの呻きは私の呻き  
「親を縛る子どもがどこの世界にいるか」

「おまえがこんな人間だとは思わなかった」  
父よ  
あなたの怒りは私の怒り  
あなたの憎しみは私の憎しみ  
老人病棟の大部屋で  
裏返った亀のように  
青い大きな手袋をさせられて  
父よ  
生きてあることは  
どこまでも  
苦痛を伴うのか  
最晩年の一日一日に  
安らかに死ぬこともできず  
固いベルトに手首を握られて  
そうしてそれは子の私が望んだこと  
父よ  
あなたの苦しみは私の苦しみ  
あなたの悲しみは私の悲しみ  
「いくらもない土地やけど 全部売ってここから出してくれ」  
「うちへ帰りたい」

父よ  
あなたの憤怒は病院の壁を突き抜ける  
この風雪を超えて  
私の胸に突き刺さる  
「毎日 幸せに楽しくとは言わん。せめて普通の家族でいたい」  
「何もせずにこのまま死なせてくれ」  
父よ  
あなたの呪いは  
この雪の中で私に降りくる  
はらはらと降り続け  
私の心に降り積もる  
世界は風となって 荒れ狂うのか  
雪よ舞え 雪よ踊れ  
風よ 歌い奏でよ  
父と私が この先に  
春の日差しに照らされるその時まで

老人病棟25時

親父が死んだ  
真夜中に7階老人病棟で  
口を大きく開けて  
この世の空気を一杯に吸い込もうとして  
三つの時代を生き抜いて  
出征もした 飢えにも耐えた  
汗を流し  
血を流し  
生きて死んだ  
病室はすぐに死体仮安置場所になる  
点滴薬もチューブも  
オムツや濡れティッシュの買い置きも  
もう何の役にも立たない  
看護師が言う  
「ご遺体をできるだけ限り早く  
ご自宅に運び出してください」  
「霊安室はありません」  
死んだ者は一息できない  
トンネルのように  
明かりの薄い廊下を  
静かにそれでもコツコツと

親父の形をした人形とくぐって行く  
消灯し寝静まっているはずの  
薄闇から  
ポカンとした声が飛び出してくる  
間欠泉のように呻きが吹き上がる  
「オヤジ、病院仲間か？」  
エレベーターの箱の中だけが眩しい  
親父は神々しく変身したのか  
それとも  
オレらは 角砂糖の中の不純物が  
裏玄関でストレッチャヤーが止まる  
黒い車がスーウツと現れる  
主治医と看護師が直立し  
黒い世界の入り口で  
深く深く頭を垂れて見送ってくれる  
「オヤジ、帰るぞ」  
ゆっくりと車が滑り出す  
主治医と看護師は  
周囲の暗さに段々滲んで消える  
運転手は前方を直視したまま動かない  
顔は……能面  
街も能面  
夜も能面  
能面の案内者たちが導くのは  
どんな世界か

これから親父が辿るのは  
三か月の間憧れた  
懐かしいあの家への道ではない  
終の住処は遺体一時安置場所に変わり  
家族はすでに遺族に変わっている  
「オヤジ、この道は黄泉の国へ行くんだ！」  
人間世界の儀式は終わった  
黒い色の人間たちが  
灰色の空の下で交差した  
人間たちが亡霊の中を流れている  
親父は白くて太い骨を見せるだけになった  
耳の奥底でツーンとする響き  
風にならない空気の澱み  
薄暗いあの病棟  
今もずっと続いている  
老人病棟25時

## 老人病棟の朝

老人病棟に朝日が差す頃  
勤行が始まる

「オーイ、オーイ！」  
しゃがれた声や

「かあさん、かあさん！」  
咳が混じり

「——子、——子！」  
数々の読経

プラスチックの食器がこすれ合い  
箸によって叩かれる……

ベッドに寝たまま  
両手を高く伸ばし  
空の中から

透明の何かを掴もうとする……  
左へ、そして右へ

体を動かし

存在を計測する……

いくつもの宗教儀式

能面の父たちは

黙想を続けている

老人病棟の

数限りない、今は行き先のない音声よ

老人病棟の

数限りない、今は引き取り手のない動作よ

それらがこれから

意味を帯び

祈る行為に昇華して

絶対者に届け

あらゆる老人たちが救済されるために

## 受賞の言葉

## 北村俊保

私の父は昨年（二〇〇五年）十月に入院し、今年一月に亡くなりました。入院中、私はほぼ毎日、平日は勤務終了後に、休日は面会が許される限り付添いました。

その時に見たり、聞いたり、感じたりしたことを基にしてまとめた作品が、今回、賞をいただくことになりました。父を偲ぶ縁ともなり、ありがたく思っております。

私はこの四十年間、詩や文章を書いたり、長く休んだり、また書いたりを繰り返してきました。私が今、書き続けていられるのは、古い友人たちの無形の励ましがずっとあったからです。その友情に応える意味でも今回の受賞は非常にうれしいことです。

私はこれからも、静かに少しずつ書き表していきたいと考えております。



きたむら としやす

1953 年生まれ  
1977 大学卒業、高校教員となる  
2006 教員生活、30 年目を迎える

## 第二回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

## 伊藤伸太郎

### 静けさに満ちた情景

両岸の水際に幾本も聳える  
カワヤナギの葉の中から  
湧き立つように飛散する綿毛……  
ゆるい風に乗って小雪のように舞い、  
ふと見ると川面にもびっしり浮かんでいる。

薄く泥濁りをした水は  
夕刻の斜光を受けて  
古い壁画の沈んだ輝きを放つ。

風で飛ぶ柳絮の中に立ち、  
ゆったりした流れを見つめていると  
大きな魚の背と頭部が水面に渦を描き  
時々バシヤッ バシヤッと水音が上がる。

その夜は印象深い夢を見た——。  
故郷の山麓を流れる川で釣りをして  
鯉を狙っているのだが、  
青い水の中から上がって来たのは  
十数センチの《ネコギギ》だ。

ナマズによく似た長いヒゲと  
毒のある鋭いヒレを持つ泥色のそれは、  
水草の上でくねくねと動いた。

それ以後の数夜、

不本意なしかも何かしらグロテスクな

魚族ばかりを釣る夢が続いた。

村外れの川や池が

幾種類かの水草の形や色、

水の濁りや流れのきらめきなどを伴って

次々に押し寄せ

胸を熱くする明け方もあった。

やがて終末が心に浮かぶ——。

うすぼんやりした田舎の古井戸に似て、

人が誰もいない暗い静けさに満ちた情景が

眠れない頭脳に幾度も浮かんでくる。

懐かしさを秘めたその寂しさが

我が魂の原郷であれと願う。

### いとう しんたろう

1948 岐阜県・養老山脈の麓に生まれる  
1977 作家井上光晴が長崎県佐世保市に開設した第一期文学伝習所に参加  
1978 第三期伝習所に参加  
1997 6月、水泳中に脳出血で昏倒、死に近づく。リハビリが功を奏し9月退院  
1999 夏より詩（らしきもの）を書き始める  
2004 詩集『野薔薇忌』（影書房）を刊行  
千葉県松戸市在住



## タガメ少年

夏休みの朝早くフナ釣りに行き  
どこまでも続く稲穂の中へ入った。  
ヒシの葉と白い小花が水面を覆い  
広い池は静まりかえっている。  
延べ竿に仕掛けを結んでミミズを刺し  
五本ともヒシの葉に寄せて投げ込む。  
炎天に突っ立っていると  
感覚が融け崩れて変容していく。  
ヴォーヴォーと唸るウシガエルも  
フナもライギヨもナマズも  
リズムに溢れた動きで誘ってくる。  
歓喜の合唱だ！  
躰ぢゅうがむらむらと奮い立つ。  
着ているものもズック靴も脱ぎ捨て  
素っ裸になると  
土と下草がくすぐったくてたまらず  
足踏みしながらウキを見詰めていると  
池の底が盛り上がりつつ直立した。  
マコモは深い羞恥にうつむき  
純白なヒシの花は萌黄に染まる。  
没我と昇天が入り乱れ

視野がぼやけたまま眺めていると  
左端のウキが不意に沈み  
竿の先端が水中に引きずり込まれた。

真つ裸のまま夢中で駆け寄り  
弓なりの竿を少しづつ引き上げると  
大きな黒い影がついに現れ  
たも網で頭部をすくうと  
ゲンゴロウブナのでっかい目玉が  
無念さに濡れていた。

真夏の光と熱がいよいよ輝き  
田んぼの土と稲穂が  
濃い匂いをばらまいている。  
ヒシの葉と白い小花は緘黙し  
マコモは微風に揺れて  
しめやかに嗚咽する。

『異議アリ！ 異議アリ！』  
とウシガエルが激しく軍鼓を鳴らし  
怒ったライギヨが岸辺に突進する。  
全裸でいることが凄まじい恥になり  
底無しの池に飛び込むと  
どこまでも沈んでタガメになった。

## 鶏

中天の太陽——。  
ふと自転車漕ぐ感覚を失うのだが  
それは激しい暑熱による擬似窒息であり、  
脳と臓器をゴム引きされ  
外界と断絶した灰色の霧の中の解放感だ。  
強い麻酔薬を注入されたような痺れの中で  
そのままペダルを踏み続けた。  
やがて幾層もの寒冷紗で  
目隠しされていた暗黒が徐々に剥がれ、  
意識は確実に明るくなってゆく。  
土用を過ぎたばかりの熱射は  
均一な銀灰色の薄膜となって垂直に突き立ち  
一直線に延びるアスファルト農道には  
浅い水路が平行しているのだが、  
繁茂したマコモのそよぎは  
流れの音を静かに喰い尽くしている。  
強靱な繊維組織に守られた水稲とマコモは、  
セ氏三十度を超える熱のなかで  
むんとする濃厚な匂いを放っている。  
煙草は口腔の熱に絡まって粘膜を刺激し、  
咽喉の奥を甘くする。

自転車を停めて振り向けば  
そびえる山脈の中腹から山頂の部分は  
濃い陽炎の背後で膨脹し、  
不安定に揺れている。

熱射と温気で織られた緊迫衣に包まれて  
まったく不自由になり、  
密封されてごついハム片と化した肉体は  
脈打つ血流を聴く。  
絶え間なく成長している水稲とマコモの  
ひそやかな響きの総和、  
それに高温の土中で喘ぐ無数の小生物たちの  
濃厚単調な蠢動をじわりと感受する。

指を焦がす煙草の鋭い痛覚が緊迫衣を裂く。  
無人の水田に立ち尽くして  
恐怖を覚えるのはどういうわけなのか？  
執拗な眼を感じつつ自転車を走らせ、  
芝居がかった仕草で振り返ってみるのだが  
山麓をめくり上げて展開する桑畑は  
すでに無数の蚕を葉裏に秘めているのか、  
ぞわぞわと揺れている。

勾配の緩い坂を登り詰めると  
前方には剥き出しの土地が広がっている。  
赤錆びた鉄骨を残すだけの

## 受賞の言葉

伊藤伸太郎

### オオイヌノフグリと野バラ

プールで水泳中に脳出血で意識不明になり  
限りなく死に近づいた男はリハビリが功を奏  
して三ヶ月後に退院したが死のおびえからど  
うしても離れることができぬまま右半身の痺  
れと痛みと失語に苦しんでいた。  
一九九九年夏ごろから左手の稚拙な文字で  
詩らしきものを書き始めていたが最初のころ  
の作品は殆ど〈自然観察〉に近かった。  
名も知らぬ野草：野良猫：野良犬：野鳥の  
存在に心惹かれた男は子どもころ堤防の日  
溜まりに寝転んでオオイヌノフグリの白と紫  
の小花を眺めたり川へ釣りに行って野バラの  
花の芳香に酔った記憶がよみがえった。  
すると〈死〉など意識しない少年時代が懐  
かしく自然との様々な関わりを思い出しつつ  
表現していると深い喜びや無念さが生き生き  
と浮かび上がりようやく〈詩を創る〉意識が  
芽生え始めたのだった！

鶏舎の残骸が幾棟もあり、  
鳥インフルエンザで死滅した鶏たちの臭気を  
かすかに漂わせている。  
容赦なく視線を切り削ぐ白っぽい荒地が  
確実に近づく。

眼球に吹き付ける熱風の痛みに耐えて  
しっかりと見つめる——。  
鶏舎のトタン屋根と鉄骨は  
ベラベラと音を立てて解体し  
空中に舞い上がる。  
赤錆びた残骸は重く回転しつつ  
肉体の深部へと侵入して来る。  
巨大なハサミに似たものを構成し  
ざくりざくりと内部から切り刻みつつ……。

ぐしゃぐしゃと血にまみれた肉片や骨片は  
真昼の直射光線に輝きながら回転し、  
細部まで見え始めた半壊の鶏舎に向かって  
羽ばたく幾万もの鶏と化す。  
群れは太いゴム紐を組んで自転車を引き、  
憤怒する霊となって憑依する。  
焼けただれた鶏舎めざして  
全力でペダルを踏み続ける歓喜！

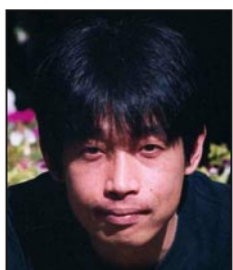
藤原ジュン

モーターバイク

照りつく日ざしに光る 革に覆われた身で  
鉄の獣の機体にまたがり 片足で立っている 君が  
ゴーグルをつけて前方をのぞみ グリップをひねってペダルを踏むと  
カシヤカシヤとすり切れた音で エンジンが空回りした後  
力がしっくりと連動した ウインという唸り声をあげて  
吠えだした 足腰から震わせる力に 胸をはずませながら  
タイヤの重みをアスファルトに 焼きつけるほど黒く刻みつけた  
いななきとともに 片足を上げて発進した 君は  
右にも左にも倒れないように 速度を上げていき  
せまり来たトンネルの 闇の奥にライトを放射した はるか先へ  
明るい筋をなぞりながら まっすぐに入っていった  
機体を流れていく光が ゴーグルもよぎって トンネルを出たら  
かがやいた世界の 流れる足下に 過去を打つほどに ペダルを蹴り  
熱い風になって ななめに突っこんだ カーブに  
体をギリギリまで傾けて 心まで放たれないように  
引く風をふり切りながら 立て直した 新しい速さののり  
さらに加速して 風に食らいつき 音が消えていく  
冴えわたる感覚の 前に広がる 輪切りの風の中を  
吸いこまれるように進み入り 熱さをこえて透きとおっていく  
むこうへ ためらいなく飛びこむと 冷たさもこえた 弾丸になり  
次々と ふき飛んでいく景色に 何もかもを忘れさせてくれる  
この機械と 一つになって 走ること自体と化した 本気の遊戯は  
切り開いては過ぎ去る勢いのまま 明日へも突っこんでいった。

ミス・ワールド

交差点でぶつかった 三人の腸がとび出して 絡まりあい  
どれが誰の体なのか分からなくて 調べにきた警察官も泣いたらしい  
昨夜 隣町であったことです、と 中古車販売業者の人から聞いた  
将来を期待されていた男女の車と 幼い子もちの父親の車との 衝突  
突如 信じがたいほど大きな 鉄の獣の叫び声が 夜気を震わせて  
血と油と 肉と鉄が 混ざりあった 悪い夢くらい重くてリアルな  
焼き肉の匂いが あたりにたちこめている 想像をしたが  
現実に置かれた 彼らの姿は それ以上の怪物だったろう  
少しミスをしたら永久に 心から救われない 繊細な世界  
自ら造った現代社会の恐怖に 怯えながらも容認し 結局は肯定して  
魂を削りながら 生きている それが当然の この日々  
今もまさに生きている 多くの人が それぞれの思いで過ごしている  
平和を 信じがたい奇跡に感じる  
情報までが高速で行き交う今  
私たちは いつミスをして  
絡みあった自分たちの怪物の姿を 世界の交差点にさらすのだろうか  
そしてその時 私たちに ものを見る目はあるのだろうか。



裸身

ひざをおり 身をおさめた 湯の  
気を見ているうちに 頭の中もうすれてきて  
何気なく掌をあわせた その先に にじむ白さに  
音もなく 光の粒が浮かんでいて  
指につまんで口にふくむと すとん、とのどから胸に落ち  
力は そこから発しはじめて

湯に さらにさらとはがれた 皮膚からあらわれた  
あたらしい身は 光の白さで  
凹凸もなく 顔もなく ここには私などおらず  
背ののびる羽は 今は 飛ぶためではなく 開くためにあり  
霧のむこうに 浴室をこえて まぶしく広がっていき

この姿ならば 誰が見てもいい  
誰の目も記憶もつぶす 光の姿は  
今日の 喜びも悲しみも すべての裁量と報復を  
全体をこえた何かにゆだねていて 心はすっかり安らいで…  
と  
白く広げた時を閉じると ふいに 羽のない身が目に入り  
湯を出た体の 重みに息をつき 浴室を出て 鏡を見れば  
お肌のバズルも元どおり 鼻のひくい いつもの顔の  
頬が赤らんでいるのに 目を落とした  
そこに直面した ぼつりと立つ裸体が  
血めぐり盛んに赤く染まって 白い気をたち昇らせていた。

受賞の言葉

藤原ジュン

「良いことと悪いことは重なって起こる」とききますが、ならば悪い  
ことを先に味わっておきたいと思うのは、私だけでしょうか。  
最近、目が点になる出来事が二つ、身に起こりました。一つは、風  
邪をひくのもまれな私に、帯状疱疹が現れたことです。疲労の自覚が  
なかっただけに、医師の診断に目が点になり、何よりも初めてお世話に  
なる抗生物質の値段の高さに驚きました。そのちょうど一週間後の夕  
方に、今回の受賞の一報を受けました。もう一つとは、いうまでもな  
くそのことです、本当に信じられない嬉しい結果で実感がなく「お  
めでとうございます」にも「あ、どうも」としか応えきれませんでした。  
「果報は寝て待て」とききますが、まさかこんな形で実現するとは—  
いやいや、今回は悪いことが先に起こっていますから、わが身にも  
気兼ねなく心底喜んでおります。「過労で寝て待つ」良いこともある  
ものです。

今回の受賞の喜びをもって、最近は何かと過分な世の物事にも、し  
っかりとバランスが保たれておりますことを、あらためて信じようと  
思いました。ありがとうございました。

優秀賞

藤原ジュン

ふじわら じゅん  
1996 詩集『そら／春と土』(新風舎) 出版  
2002 詩画集『生花体』(文芸社)と小説『花壇／草とウサギ』(健友館)を同時出版  
2004 詩「杖物語」で佐賀新聞読者文芸年間大賞詩部門一席「天賞」受賞  
詩「夕刻に」で佐賀県文学賞詩部門一席受賞  
2005 佐賀県内の若手詩人のアンソロジー詩集『八重奏』(創作会議)出版  
—この間、各賞で二席・三席・佳作・審査員特別賞等を受け、詩誌やアンソロジー等に詩や短編小説を掲載している。